（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　竹腰　祐子

本論文は、十九世紀末から二十世紀前半にかけて、ドイツ語圏、すなわちミュンヘンおよび旧オーストリア＝ハンガリー帝国領のプラハを中心に、活躍していた特異な作家グスタフ・マイリンク（1868-1932）の作品から、主として二つの長編小説『ゴーレム』(1915)と『西の窓の天使』(1927）をとりあげて論じたものである。

従来、マイリンクの作品は、一方で、ベストセラーになった『ゴーレム』がその典型と見做されたように、大衆の嗜好におもねる通俗小説として、他方で、この二つの作品にみられるように、「ゴーレム」伝説やジョン・ディーの神秘思想など、古今のオカルト的な言説を折衷した幻想小説として、一般に受容されてきた。多くもないアカデミックな研究にしても、こうした了解の域を超えるものではなく、その結果、文学作品として読む試みは、そこでは等閑に付されてしまっていた。それにたいして、論者は、小説としての内的構造を分析することから立論しつつ、いずれの作品も、過去に生きていた先人が、というよりも先行する言説が、主人公に憑依するという、共通した主題を有していることに着目する。そして、「読むこと」による自己同一性の揺らぎ、多重人格的な複数の「わたし」への増殖が、作品の内部にとどまることなく、作者や読者をもまきこんだ運動へと展開していることを明らかにする。この分析は、マイリンクにおいて、ユングの「集合的無意識」に類似したモティーフが存在するという認識を導きだしながら、他方、書物の活版印刷に体現される複製技術の発展を、第一次大戦における殺戮、個としての存在の無差別化と、軌を一にするものと見做す、いわば歴史的な知見を生みだすことにもなる。ちなみに、マイリンクが執筆する際に、パルログラフ、すなわち音声の自動記録装置を利用していたという論者の指摘は、作者のゆるぎない自己によって保証された言語芸術作品という、伝統的な文学理念に疑義を呈するという意味でも、きわめて興味深い。

本論文は、細部において読解にやや緻密さを欠き、用語の不明瞭、論理的な不整合等が散見されるものの、ドイツ語圏においてもほとんど先行研究のない、マイリンクの小説を文学作品として定位するための一歩を印したという点において、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。